



異文化体験に根ざした日本認識 —日本学生支援機構ショートステイプログラムを終えて—

大連理工大学外国語学院日本語学科長 孟 慶栄

昨今、グローバル化が進む中、外国語学習者にとって異文化体験がより身近なものとなり、また学習の不可欠な一環となりつつある。毎年、言語学習を含めた異文化体験を現地で試みる学生も増えている。大連理工大学^(注1)も例外ではなく、毎年国外への留学生派遣数は短期留学を含め200人弱あり、さらに増加傾向にある。しかし、5万人あまりの在校生数(大学院生含む)に対しては、その比率は少なすぎる。その上、外国語学院日本語学科への割り当ては非常に限られている。このような状況に鑑みて、2008年以降日本語学科では日本の大学との連携を通して学生の留学派遣の道を模索してきた。しかし、連携協定のある日本の大学へは短期派遣のみで、単位交換を含む15名前後(200人の8%)にとどまっている(2012年6月現在)。留学生派遣における一番の難点は、やはり諸費用の高さにある。同じ要因で長期滞在(1年またそれ以上の滞在)の留学生派遣はまだない。

このような状況の中、2011年9月11日から10月2日まで、横浜国立大学人間科学部の村田忠禧教授が申請した日本学生支援機構によるショートステイ(SS)プログラム^(注2)の一部が大連理工大学日本語学科との間で実施され、日中間の「相互補完型」^(注3)外国語教育の試みが開始された。この中で先ず、横浜国立大学の中国語履修学生計25名(内SS奨学金支援17名)が大連理工大学で3週間にわたり語学力の強化、実習、企業見学、史跡訪問などを通して生の中国社会を体験した。

続いて、2012年1月8日から17日までプログラムの第2弾が横浜国立大学で実施され、大連理工大学の日本専攻コースおよび機械専攻日本語強化コース、計算機専攻日本語強化コース、材料専攻日本語強化コースの計20名の学生がSSの奨学金支援制度を活用し、短期滞在型の日本の大学、社会文化の体験学習を実現した。ここまでで中国語または日本語短期(相互)派遣留学の実施が一巡して次の段階へ進むことになった。

大連理工大学でのプログラム実施後、双方の参加学生を対象にしたアンケート調査、レポート提出、座談会の開催などの結果報告では、語学上達の効果ばかりではなく、異文化理解の促進、相互信頼関係の強化および後の交流へのつながり等の効果もあり、かなり有意義な内容であることが確認された。現在、大連理工大学でも学内研究プロジェクトとして日本語人材育成研究プログラムを申請中である。

また、双方の教師がこれまでのプロジェクト実施を通して、相互補完型ハイブリッド外国語人材育成モデル構築への模索の成果について、2012年名古屋大学で開催される世界日本語教育大会において連名で報告する予定である。これを機にこの取組みの成果がより広く普及することが期待される。

実は、これまで大連理工大学日本語学科では、毎年夏から秋にかけて日本の幾つかの大学と

の間で学生交流が盛んに行われてきた。しかし1回の交流期間が比較的短期間（1～3日）であることもあって、活動内容という食事会や講演会、買い物案内にとどまることが多く、双方の学生にとって交流の継続にはなかなか繋がらなかった。これも当然のことで、継続を促すにはそれ相応の時間をかけ交流内容にも工夫を加える必要があると思われた。

しかし、ここで紹介している2011年夏に行った横浜国立大学との交流は、これまでの交流とは違う形のものになった。同大学の中国語履修学生と大連理工大学の学生は、日本語と中国語によるそれぞれの授業のほかに毎日様々なイベントを楽しんだ。同じ教室での授業参加や食堂での食事、体育館でのボーリングやビリヤードのレクリエーション、企業や文化施設の見学、週末のバスでの買い物など、このような日常的な付き合いを体験し、帰国後も学生同士のメールやチャットなどを通じた交流が続いたことは、何よりも収穫ではなからうかと思われる。人間にとって気持ちの通じ合いが何よりも大切なことを実感させられた。

そして、2012年1月8日から17日の10日間、再び横浜国立大学を舞台に大連理工大学の学生が日本での社会体験学習を行なった。経済的負担を少なくするため滞在期間は限られていたが、日本語学科や日本語強化コースの学生にとって集中的に日本の社会体験を行なうプログラムは、かなり充実した内容であった。まず横浜国立大学で学生たちの専攻に合わせた授業参加が実現できた。将来日本への留学を考える学生にとっては切望される内容であった。ほかに横浜国立大学卒業生による社会人公開講座では、新聞記者の仕事の大変さ、公務員になるための心の準備の話など実体験に基づく講演がなされ、普段勉強漬けの中国人学生にとって斬新なものであった。しかし、特に心を強く打たれたのは、「満蒙開拓団」のDVD鑑賞であった。中国に多大な災難をもたらしたあの戦争は、日本語教育に従事するわれわれにとってはもっとも触れたくない歴史の1ページである。しかし、いつまでもこの問題を回避しては行かず、歴史の事実を直視し、その上お互いに真の気持ちを語り合うことが何よりも大事なことであり、またこれに向き合うことによって真の信頼関係が生まれるのではないかと考えさせられた。学生たちだけではなく私たち引率教員にとっても、日本人の真摯な気持ちを感じさせられるものであった。また戦争という悲惨な出来事は被害者だけではなく、加害者にとっても辛い歴史であったことが実感でき、日本史のもう1つの側面を垣間見ることができた短期交流であった。

企業や社会文化施設の見学のほか、満員電車に乗った経験は、多感な若者たちには教科書から習うものとは別の豊かな収穫となったことはいまでもなからう。

プログラム実施責任者の村田忠禱教授をはじめ、川崎市経済労働局の増田宏之、佐藤麻乃、NPO アジア起業家村の牟田口雄彦、北孝史、大和総研の後藤あす美の諸氏ら、また多大な協力をいただいた横浜国立大学の先生方、交流参加の中国語履修コースの学生たち、このSSプログラムを提供して下さった日本学生支援機構にも、この場を借りて一言感謝の意を表したい。

注

- (注1) 中国遼寧省大連市にある理工科をメインとする大学であるが、外国語学院日本語学科や日本語強化コース、日本語を第二外国語とする学習者合わせて2,000人弱を擁す。
- (注2) 横浜国立大学が申請し、日本学生支援機構が提供する短期留学プログラムで、1人8万円が支給される。
- (注3) 横浜国立大学は中国語履修学生を対象とし、大連理工大学は日本語学科の学部生を対象としており、お互いに補える部分（語学の相互協力）が大きい。